

## 山間地集落の実態と NPO 活動の展開 - 一関市大東町曾慶集落を例に -

三浦隆博・菊池陽佑（岩大院農）、岡田秀二（岩大農）、佐々木一也（岩大農附属 FSC）

### 1．課題と背景

山村が抱えた問題は奥深く、短期間に解決したり、明確な方向性を具体的に打ち出せるようなものではない。しかし、山村では、様々な試みが続けられている。そうした一つとして NPO を立ち上げ、様々な事業展開をしている地域の動きについて今春事例報告をした。この NPO の事業展開の中で、目立つことなく、様々な形でサポートしているのが、地元や隣接する集落の人々の活動である。あるいは、集落が思わぬところで顔を出すことが少なくない。本報告では、NPO を立ち上げた地域における集落に注目し、NPO と集落との関係について捉えようとする。

### 2．対象地及び分析方法

対象地は、一関市大東町曾慶集落である。分析は、集落とそれを形成する農林家及び非農林家の最近の状況を農林業センサスの集落カードを分析する一方、曾慶集落内の第 4 区といわれている地区には、独自のアンケート調査を行い整理した。

### 3．分析

地域の特徴：曾慶集落は同名の川から南側、北西向きの斜面に立地している集落で、小さな沢に添って、何戸かの家がかたまりをつくり、そうしたかたまりが方々に点在していることで成り立っている。農用地は沢の脇に棚状にあり、傾斜地には樹園地も多く存在している。

センサス分析：総戸数、農家戸数を見ると、1970 年では、総戸数 402 戸、うち農家戸数が 372 戸で、2000 年には、総戸数 388 戸、うち販売農家で 269 戸と非農家、自給的農家が増加したため、減少し続けている。専業、兼業で見ると、1970 年で専業 95 戸、兼業 277 戸で、2000 年には、専業 34 戸、兼業 235 戸となっている。兼業農家の主な収入を見ると、1970 年には、出稼ぎが約半数と多かったが、2000 年には、恒常的勤務が 75%と大半を占めるものとなっている。

アンケート分析：家族構成別にみると、単身世帯や高齢者のみの 1 世代の世帯では、集落は 10 年後になくなっていく、集落における活動が少ないほうがいいなど悲観的な意見を持っている。一方、2 世代、3 世代の世帯や土地所有面積の多い家では、この集落からの移転は考えていないこと、さらには今後発展していくのではという期待をもっている農家もいる。さらに、主な収入別に見ると、年金での生活や土建等の日雇いで生活しているあるいはしていたという方々は、土建等の雇用の減少や農林業生産物価格の下落などから生活が苦しくなり、集落からの移転を考えるなどの意見が多く見られる。また、集落に存在している組織の中で、部落会には、多くの家が積極的な参加をしている。また、集落における活動では、7 割以上の方が、満足しているやもっと活動を増やしても良いと応えていることから、この地域において、自治会・部落会は大きな役割を担っている。

歴史展開整理：集落形成の歴史は古い。1 家族平均約 11 人と大家族の上、いくつかの家族から成る複合家族が多かった。一定範囲内に一族が寄り合って住み、佐藤、熊谷といった姓が、字毎にかたまっているのは、こうした歴史があるからである。

森林利用と集落：早い時期から砂鉄精錬用の木材として集落の森林が利用されたが、所有は地主家格的農家に偏在しており、必ずしも農林業家が広く所有するものではなかった。

NPO 活動と集落：今年度も、NPO が管理を委された森林で、開園式や植樹祭、植物観察会、森の音楽会、ツリークライミングなど多くの事業を展開しており、その参加者の多くは集落や隣接する集落の人であり、彼らが植物や山菜のこと、またはこの集落のことなどを事業の中で語ってくれるなど、NPO の活動を陰で支え、それをきっかけに集落を見直す機会にもなっている。また、集落の人々の人脈等から派生しており、都市部の方も活動に参加するようになった。

### 4．今後の課題

NPO が形成され事業展開が行われることで、集落にある森林が都市的ニーズ等を背景にしなげらも、集落の人々の多くが係わりを持つものへと内容変化をおこしている。今後はこの背景にある動きや論理を探っていくことが課題である。

（連絡先：三浦隆博 [a3206028@iwate-u.ac.jp](mailto:a3206028@iwate-u.ac.jp)）